

# 日本の教育界におけるルソーの援用の特殊性 —「子どもの発見」言説の発生と定着の過程—

## Peculiarities of Invocations of Rousseau in Japanese Educational World.

—The process of emergence and establishment of the discourse of “Discovery of the Child.”—

富 田 晃\*  
Akira TOMITA\*

### 要 旨

日本の教育界では、18世紀フランス語圏の思想家ルソーを「子どもの発見者」と表すことが定着している。本研究では、ルソーの「子どもの発見」の所与性にメスを入れ、教育学に固有の「誤読」のあり方を解明する。大正新教育運動のスローガンとして「子どもの発見」という言葉が生まれた。1932年に梅根悟がルソーを近代教育思想の創始者と記し、1935年に稲富栄次郎が「子どもの発見」の言葉のもとに、ルソーの『エミール』を示した。戦後、梅根は『近代の教育思想』1961においてルソーを近代教育思想の創始者とあらためて記し、その見出しを「子どもの発見」とした。すると、桑原武夫『ルソー』岩波新書1962と今野一雄訳『エミール』岩波文庫1962に「子どもの発見」が記された。1980年代にルソーの「子どもの発見」が教員採用試験の定番問題となった。戦後日本の教育学の重鎮、稲富、梅根を批判的に検証することは控えられ、ルソーの「子どもの発見」言説は現在に残った。

キーワード：エミール 新教育運動 自然に帰れ 稲富栄次郎 梅根悟

### 1. 問いと背景

#### 1.1 問い

日本の教育界では、18世紀フランス語圏の思想家ジャン＝ジャック・ルソー（1712-1778）を「子どもの発見者」と表すことが定着している。ルソー自身は「子どもを発見した」といってないし、いずれかの公的機関がその「発見」を認めたこともない。切れ目のない人間の生涯を「子ども」と「大人」に分けることは、あらゆる文化で行われてきたことであり、誰かが「発見」しなくても「子ども」はいる。そして、ルソーの教育思想を「子どもの発見」と表すことは、日本以外ではあまりなく、日本でも教育界以外ではあまりない。では、一体、いつ、誰が、なぜ、ルソーの教育思想を「子どもの発見」の言葉で表し、その言説が、どのようにして、日本の教育界に定着したのか、これが問いである。

ルソーの著作には安易な一般化を拒む多義性がある。ドイツの哲学者カッシーラーは、ルソーの著作にみられる矛盾、分裂、虚構などを指摘し「ルソー問題」と呼んだ（カッシーラー、1977（1932））。一方、日本では、かつて、ルソーの思想を「自然に帰れ」の言葉で表すことが広がっていた。本稿は、ルソーの「子どもの発見」を「自然に帰れ」と同様に生じた日本におけるルソーの援用の特殊性ととらえて、この言説の発生と定着の過程を明らかにする。

本稿は、ルソーが「子どもは人間ではない」とみなしていたことについて論じた富田晃「ルソー『エミール』（1762）読解のための序説」2021の継続研究である。ルソーの「自然に帰れ」言説については小林（1985）に多くを負っている。一方、ルソーの「子どもの発見」言説の形成過程を論じた先行研究はない。資料探索において、一般の書物、雑誌は国立国会図書館の全文検索機能を、教科書は教科書研究センターの

\*弘前大学教育学部美術教育講座

Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University

教科書図書館を、教員採用試験問題は書籍化された過去問題集を利用した。

## 1.2 日本におけるルソーの普及と研究の概略

フランス、イギリス、アメリカでは、さほど教科書に載らないルソーであるが、日本では、中学校社会科の教科書に肖像画とともに示されていることもあり、ルソーの知名度は高い。ルソーの代表作は『人間不平等起源論』1754、『社会契約論』1762、『エミール』1762、『新エロイズ』1762、『告白』1782である。日本におけるルソー受容の黎明は、明治初期の自由民権運動と結びついた中江兆民によるルソーの『社会契約論（民約論）』の普及、明治中期の島崎藤村や森鷗外の文学運動と結びついたルソーの『告白（懺悔録）』の普及、そして大正新教育運動と結びついたルソーの『エミール』の普及の三つの波がある。第二次世界大戦期中断の後、戦後まもなくルソーの受容は再開され1970年代から1985年までの盛り上がりを経て、現在に至る。

ルソーの『エミール』は、先行して紹介されたフレーベルやペスタロッチの教育思想の背景をなすものとして紹介された。ルソー、フレーベル、ペスタロッチが説く、「自由」と「感性」を大切にする教育思想は、明治期からの画一的教育を排し、一人一人の子どもの関心を大切にしたい自由な教育を目指す新教育運動をささえた。戦前の訳本に、菅學應訳（1897）、山口小太郎・島崎恒五郎訳（1899）、三浦関造訳（1913）の抄訳、内山賢次訳（1922）、平林初之輔訳（1924）、鰺坂二夫訳（1932）の全訳がある。なかでも「ほとんど自由訳に近い大胆さで『分かりやすく』（坂倉，2009，p.202）記された三浦訳は爆発的に販売され「教師たちの、新教育への大衆的熱気が素朴に表現され」（原，1978，p.308）た。坂倉裕治は三浦訳を「省略や加工によって原典から大きく姿を変え」た「捏造」とし（坂倉，2009，p.203）、その受容のされ方とともに「自分が望ましいと思うことだけを受けとめ、そのほかのことには無関心」（同，p.194）という。

明治、大正期の日本ではルソーの思想を好意的に受け止める流れ一方で、保守的な勢力からは危険思想として警戒された。そして、昭和に入り国体が全体主義へと変容していくなかで、ルソーの著作は遠のけられた。

戦後日本のルソー研究は桑原武夫を代表とする京都大学人文科学研究所のルソー研究会にはじまった。この研究会は、海外のルソー研究を参照しながら、ル

ソーの著作をフランス語の原典から読解、分析し、その後の日本のルソー研究のメルクマールとなった。

一方、戦後日本におけるルソーの受容は、桑原らによってはじめた学術研究とは別に、教育関係者による普及・紹介的なものがある。

## 1.3 ルソーの「子どもの発見」の現状

日本の教育学の事典や概説書には、必ずルソーの教育思想の要約が記され、その大半に「子どもの発見」の言葉が使われている。以下、教育学関係の事典類の「ルソー」の項から「子どもの発見」を含む記述をいくつかあげる。

- ・世界の教育史上では、ルソーを『子どもの発見者』と呼んでいる。（莊司雅子『保育学事典』光生社，1976）
- ・教育史上、一般に『子どもの発見』といわれる。（原聡介『新教育大事典』第一法規出版，1990）
- ・ルソーは『子どもの発見者』と呼ばれ（坂倉裕治『教育思想事典』勁草書房，2000）
- ・ルソーは子どもを「発見」したといわれ（越水雄二『教育史』学文社，2009）

いずれも、いつ誰がルソーを「子どもの発見者」と呼んだか示さないで「呼ばれる」としている。「子どもの発見者」としてルソーをみなすことを所与のものとするこの傾向は、教育関係の学術書、一般書、論文、エッセー、教員採用試験にもおよそ共通する。

こうしたなか、森田伸子は『教育名言辞典』1999のなかで「教育関係者の間では、しばしば『子どもの発見』という一種の歴史的事件と結びつけて引用されてきた」（p.505）と、ルソーの「子どもの発見」の所与性に疑義を示している。森田は「近代教育学は、きわめて多様性に富む近代の様々なテキストの、これまたきわめて画一的な『誤読』からなっている（中略）近代教育思想から近代教育学への道筋をめぐる研究とは、教育学に固有の『誤読』のあり方を解明することになる」（森田，1992，p.38）という。

原聡介は1978年にルソーの「受容史を考察する際の関心事は、その多様な解釈の可能性の中からどのような特定の解釈が選ばれたのか、という事実と、なぜそれが選ばれたのか、という歴史的意味にある」（原，1978，p.304）を目的とした論文の考察対象を戦前とし、戦後を外した。

以下、本研究では、ルソーの「子どもの発見」の所与性にメスを入れ、戦前、戦後の双方を視野に入れて教育学に固有の「誤読」のあり方を解明する。

#### 1.4 ルソーを「子供の発見者」と表すことは妥当か

「発見」とは、知られていなかった物事を見つけることである。ルソーが、「子ども」に関してしたことは「発見」の語にふさわしいのか。

『エミール』岩波文庫版、1962-3の訳者、今野一雄は「ルソーがなにか気のきいたことを言っているとき、それはほとんどみなモンテーニュにあるような気がします」（今野、1962, p.7）という。ルソーは16世紀のフランスの思想家モンテーニュ（1533-1592）に多くを依拠した。次はモンテーニュ『エッセー』「カニバルについて」の一節である。

彼らは野生である。われわれが、自然はひとりだけに、その自然な推移の中に産み出す成果を野生と呼ぶのと同じ意味において野生である。しかし実際は、われわれが人為によって変容させ、自然の歩みから逸脱させたものをこそ野生と呼ぶべきである。けれども、あの未開のいろんな果実の馥郁たる香気や甘美な味は、われわれの嗜好にさえ、われわれの果実に劣らず、すばらしく感じられる。技巧がわれわれの偉大で力強い母なる自然よりも名誉を得ているというのは不合理である。われわれは自然の作物の美しさと豊かさの上に、あまりに多くの作為を加えずぎて、これをすっかり窒息させてしまったのだ。（モンテーニュ、1965（1580）p.398）

モンテーニュは、新世界に住むという「カニバル人」をヨーロッパにはびこる「悪」や「不平等」と無縁な「理想の人間」とした。モンテーニュは「カニバル人」を「神の手からつくられたばかりの人々」（モンテーニュ、1965（1580）p.400）といて「エデンの園」に住む「最初の人間」に近いものとするとともに、「あまりにも子供」（モンテーニュ、1966（1588）p.237）といて生まれたばかりの子どもになぞらえた。

ルソーはモンテーニュにならい最初の人間は良かったが、文明が人間を堕落させたとして「人間の歴史」を構想し『学問芸術論』1750と『人間不平等起源論』1755を書いた。ルソーの「人間の歴史」は哲学上の思考実験であり事実ではない。ルソーが、思考実験の「人間の歴史」を本来関係ない「個人の成長」にあてはめたのが『エミール』である。次は『エミール』の要約とされる一文である。

万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪く

なる。（中略）人間はみにくいもの、怪物を好む。なにひとつ自然がつくったままにしておかない。人間そのもののさえそうだ。人間も乗馬のように調教しなければならない。庭木みたいに、好きなようにねじまげなければならない。しかし、そういうことがなければ、すべてはもっと悪くなるのであって、わたしたち人間は中途半端にされることを望まない。こんにちのような状態にあっては、生まれたときから他の人々のなかにほうりだされている人間は、だれよりもゆがんだ人間になるだろう。偏見、権威、必然、実例、わたしたちをおさえつけているいっさいの社会制度がその人の自然をしめこらし、そのかわりに、なんにももたらさないことになるだろう。（ルソー、1962（1762）p.23）

モンテーニュの一文と見まごうまでに似ている。共に「自然への憧憬」「人為の否定」「植物の比喩」といった内容をもつ。ルソーは、モンテーニュから「人間の歴史」と「個人の成長」を同一視することや「自然の教育」「消極的な教育」のアイディアを得て『エミール』を編み出したのである。（坂入、1979/ 富田、2021）

こうしたルソーの構想は、「子ども」のとらえ方において、ある程度の新規性はあるが、「発見」が意味するようにそれまで知られてない事物を見つけたわけではないし、日本の教育界でよくいわれるような、従来の子ども観を大転換したとまでいえるものでもない。つまり、ルソーの教育思想を「子どもの発見」の言葉で表すことは、解釈する側の個別性によっては、ありえることなのかもしれないが、それを一般性のある所与のものとして扱うことは妥当ではない。

## 2. 「子どもの発見」言説の発生と定着の過程

### 2.1 戦前の新教育運動と「子どもの発見」

日本語の格助詞「の」は前の名詞を主格にも対象にもするので文脈を伴わない「子どもの発見」は意味をなさない。「子どもの発見」という字並びは文中で使われるのが通常であり、単独での使用は不自然である。

「子どもの発見」が一つの言葉として使われはじめたのは大正期の新教育運動においてである。1923（大12）年に根岸喜明は「20世紀は子供の発見された『児童の世紀』である」（根岸、1923, p.55）と、大正児童文学の興隆を「子どもの発見」と表した。雑誌『教



育研究』では、田中豊太郎が綴り方教育を（田中，1924，p.125），宮川菊芳が童謡教育を「子どもの発見」（宮川，1925，p.63）を使って論じた。

ルソーに関して使われる「子どもの発見」は、「子どもが発見」でなく「子どもを発見」の意味である。一方、「子ども」は「発見」しなくてもすでにいるとみなすのが常識なので、「子どもの発見」は語義矛盾である。そして、語義矛盾には人の興味を惹きつけ、その言葉の背景を理解させようとする力がある。田中が「あまりに奇矯な言」（田中，1924，p.125）といいながら「子どもの発見」を使用したのは、この言葉に社会を改革するスローガンの力を感じたからだろう。

戦前のアカデミアにおいてルソーの教育思想を論じたのは稲富栄次郎（1897-1975）と梅根悟（1903-1980）である。1932（昭7）年、ドイツ教育思想史を専門とする梅根は『教育学研究』創刊号に「教育学自立の創基者とも講すべきものはかのルソーである」（梅根，1932，p.80）と記した。梅根が日本で最初にルソーを近代教育思想の創始者として記したようである。参考文献が示されていないが梅根はドイツの文献を参考にしたのだろう。「ドイツに於ける教育哲学の趋向」と題した梅根の論考のなかにこの文言がある。ドイツは、日本とともに、特異なまでに、ルソーを高く評価した国である。

稲富は『ルソオの自然観と教育説』1934で『エミール』を読解した。ただし、この書物では、ルソーを近代教育思想の創始者と記していないし、「子どもの発見」という言葉も使っていない。稲富はルソーの矛盾や限界を示しながら『エミール』を批判的に分析した。一方、稲富が翌年に著した『教育作用の本質』1935では「子供は決して単に成人となる為の手段準備としてのみその存在権を認められるべきではない。もっとも中世的な人生観に於いては、子供は大人の縮図としてのみ理解された。そこには小さな大人があるのみであって、子供はなかった。しかしながら、全ての近代的な教育思想は子供の発見という事から出発する。『子供の中に大人を見ずして、子供の中に子供を見る』事から出発する」（稲富，1935，p.128）と記した。『』内はルソーの『エミール』からの引用である。現在、語られるルソーの「子どもの発見」と一致する内容である。稲富のこの一文が、日本におけるルソーの「子どもの発見」言説の起点とみることができる。参考文献は示されていない。稲富はドイツ語を得意とした。ドイツでは、ルソーの教育思想を「子どもの発見 *Entdeckung von Kindern*」と語ることがあるよう

である。稲富はドイツの文献や梅根の論文を参考にこの一文を記したのだろう。

昭和初期が過ぎ、全体主義化する国体のなかで、ルソーの著作の全てが遠のけられた。

## 2.2 戦後の『エミール』の普及

戦後におけるルソーの学術研究は、1949年にフランス文学者の桑原武夫（1904-1988）が立ち上げた京都大学人文科学研究所の共同研究によって開かれた。文学、政治思想史、哲学、社会学、法学、歴史学を専門にする研究者が参加し、桑原武夫（編）『ルソー研究』岩波書店、1951に成果がまとめられた。一方、この研究会に教育学者は参加してない。

戦後のルソー受容は、桑原らが開いた学術研究の流れとは別に、教育関係者による普及紹介的なものがある。教育関係者たちはルソーの著作群のなかでも『エミール』ばかりを取り上げた。西洋教育史の梅根悟が『新エミール』1951と『ルソー『エミール』入門』1971を、教育思想史の寺田弥吉が『母のためのエミール読本』1954、社会教育者の永杉喜輔が『子どもに学ぶ家庭教育：母親のための『エミール』』1973、演劇指導者の篠崎徳太郎が『ルソー『エミール』教育講義』全9巻、1974-1980と、教育関係者によって書かれた「エミール」の名を入れた書籍が次々と出版された。当時の教育関係者による『エミール』の扱いは、大概が礼賛的評価のもとに、教育の実践に活用しようとするものであり、ルソーの著作がもつ多義性を客観的に分析したものはみあたらない。

戦後、稲富は、広島文理科大学、上智大学、神戸大学、国士館大学で教員職に就くとともに、教育史学会理事、日本教育学会常任理事、教育哲学会会長といった教育学系各学会の要職、文部省のいくつかの審議会委員など教育行政の要職を歴任し、日本の教育界の重鎮になった。戦後の稲富の研究は『教育目的論』1952、『教育方法論』1958、『教育原理』1958によって戦後日本の教育学の土台をつくるとともに、ギリシャ哲学に関する書物を著した。また『ルソオの教育思想』1949を出版したがその中身は戦前の『ルソオの自然観と教育説』1934とおよそ同じである。稲富は戦前に『教育作用の本質』で示したルソーの「子どもの発見」言説を、戦後において復唱することはなかった。稲富は、ルソーの「子どもの発見」言説の誤謬性に気付いたのだろう。

梅根は川口市助役、東京教育大学教員（東京文理科大学を含む）、和光大学学長、教育史学会代表理事、

日本教育学会会長の職とともに、コア・カリキュラム連盟、日本教職員組合、中央教育審議会、日本学術会議などでの活動を通じて新教育の普及に尽力し、「戦後日本の教育界を代表する人物」といわれるようになった。

1948年に大学教員の職に就いた梅根は『エミール』を教材に学生指導にあたった。また1965年にNHKラジオで『エミール』の連続講義をおこなうなど、『エミール』の普及に尽力した。梅根の『ルソー『エミール』入門』1971は「自身の『エミール』の読み方」を「手引き」（梅根，1971，pp.1-2）として示したものであり、『新エミール』1951は「今日の幼稚園，小学校，中学校を『エミール』の精神によって改革すること」（同，p.241）を目的にしたものである。

### 2.3 戦後の『エミール』翻訳と教育界

戦後の『エミール』全訳は、林鎌次郎訳（1959）、今野一雄訳（1962）、戸部松実訳（1966）、長尾十三二・梅根悟・勝田守一訳（1967）、平岡昇訳（1969）、樋口謹一訳（1982）、永杉喜輔・宮本文好・押村襄訳（1982）がある。新教育運動のなかで1929（昭4）年に設立された玉川学園は、日本の教育界を牽引する存在である。永杉・宮本・押村訳『エミール』玉川大学出版部，1965の「訳者序」に次のように記されている。

私たちは、『世界教育宝典』という双書の性格から考えても、ここに加えるべき新訳は、学問的に厳密な翻訳ということを第一義とすべきであるという点で意見の一致を見た。その結果、翻訳の態度として、同じ単語は可能な限り同じ訳語で一貫させる、そのためには、時には日本語としての通りのよさを犠牲にすることがあっても、原文の趣きを厳密に忠実に生かすことを旨としようとした。（永杉ほか，1965，p.1）

永杉らが「原文の趣きを厳密に忠実に生かした」という、本書序章1節で示した『エミール』の「序」の一文の訳が次である（〔 〕内は原文の単語）。

大人〔on〕は子どもというものを知らない。だから、大人が子どもについて現在持っているようなまちがった考えをもとにして進むならば、進めば進むだけまちがった方向にいつてしまうだろう。最も賢明な人たちでさえ、大人〔homme〕が知らなければならぬことだけに心をうばわれていて、子どもたちが現在どんなことを学ぶことのできる状態にあるかということを考えてみようとしな。かれらは、子どものなかに、いちずに大人

〔homme〕を求めている、大人〔homme〕になる以前に、子どもがどんなものであるかを考えることを忘れている。（同，1965，p.8）

永杉らは、他の日本語訳書と同様にこの箇所のhommeを本来の字義にはない「大人」とする一方、他のhommeは大概「人間」としている。永杉らは「同じ単語は可能な限り同じ訳語で一貫させる」というが、その説明はない。「子ども」の対義語として使われるhommeを「大人」とすることは「常識に配慮した意識」である（富田，2021）。

hommeに続く第二の問題はonをいかに訳すかである。onは一般に「私たち」や「人」と訳出される主語代名詞であり「大人」の字義はない。冒頭のonは、「吾々」（林訳）、「人」（今野訳、樋口訳）、「われわれ」（戸部訳）、「人々」（長尾ほか訳）、「人びと」（平岡訳）と字義に即した訳書が並ぶなかで、永杉だけが字義にない「大人」としている。それは、原文の「趣き」の名のもとに差し込まれた「解釈」である。

「私たち」と訳されるフランス語の主語代名詞にnousとonがある。nousは、その場にはない第三者を含むが、onには、第三者は含まれず、その場にいる者の仲間意識が投影される。冒頭の文が示すonは「ルソーと読者」を意味するものと理解できる。「ルソーと読者」を意味するonを「大人」と訳出する「解釈」は、ルソーの原文から遊離した「誤読」である。冒頭のonのみならず、永杉らの訳文全体に、原文にないことが多く含まれている。永杉らは、彼ら独自の「解釈」をもって「訳文」としたのである。

こうした日本の教育界における『エミール』の扱いについて、坂倉裕治は「（戦前の）自らの個人的な信条と合致する主張を古典に求める態度は、後（戦後）により学問的な体裁を整えた教育学にあっても、本質的には変わらなかった」（坂倉，2009，pp.202-203）という。2012年に東京で開催された「ルソー生誕300周年記念国際シンポジウム」の発表者26名のうち教育学者は坂倉だけだった。また、雑誌『思想』が1978、2009年に、雑誌『現代思想』が1974、1979、2012年に、ルソー特集を出したが、坂倉以外の教育学者は寄稿していない。坂倉は「礼賛は、社会的コンテクストから切り離された閉塞的な空間へと教育関係者たちを閉じ込め」（同，pp.202-203）たという。

### 2.4 ルソーの「自然に帰れ」の拡散と収束

かつて日本では、ルソーの思想を「自然に帰れ」の言葉のもとに説明することが広がっていた。一方、ル

ソーは「自然に帰れ」といっていない。ルソーは「なんということだろう。社会を打ち壊し、私のものと君のものをなくしてしまい、森へ帰って熊といっしょに暮らさなければならないだろうか」（ルソー、1933（1755）p.157）や「自然の人間をつくりたいといっても、その人間を未開人にして、森の奥ふかいところに追いやろうというのではない」、「森のなかにいればいつまでも愚かなままでいなければならない」（ルソー、1963（1762）p.98）と「自然に帰れってはいけない」といっている。ルソーは「自然」を理想としながらも、「自然」に帰りたくともできないし、それはしないほうがいいことだから、ならば、どうすべきかを説いた。

『ルソー全集：別巻2』白水社1984の目録や国立国会図書館 Web サーチをみると日本におけるルソー関係の論文数は、1970年後半から1985年までがピークであり年間80本程の関係論文がある。そして1985年を境に減少し、2015年以降は30本以下である。ルソー・ブーム終焉となった1985年とは、小林善彦が論文「ルソーの『自然に帰れ』について」を著した年である。小林は問う。

ルソーの思想はわが国では広く一般に「自然にかえれ」という言葉でいいあらわされている。「わが国では」というのは、昔から現在にいたるまで、フランスの数多くの研究者のなかで、ルソーの思想を「自然にかえれ」と表現したものは、私の見るところではいないからである。そもそもルソーは、その全作品のなかで「自然にかえれ」とは一度もいっていない（中略）毎年何冊も出るフランス語のルソー研究書をみても「自然にかえれ」「自然への回帰」という表現がまったく出てこないのに、一方わが国ではなにかにつけて、ルソーといえば「自然にかえれ」と、合言葉のようになり返されるのは、なぜだろうか。（小林、1985、p.1）

小林の答えは次である。

ルソーといえば「自然にかえれ」と合言葉のように出てくるのは、テキストを読んだ結果の読解とは私には思えない。（中略）なぜこういうことがおきるのかといえ、私の考えでは中等教育で全国一斉に、ルソーを「自然にかえれ」と教えているからではないかと思う。たとえルソーの著作を、一度も読んだことがない人でも、一般教養として、ルソーという人は「自然にかえれ」といった人だという認識を学校で教えこまれているので

はないか。しかもその人たちは一全国何千万人いることだろうか—は、いつどこでルソーがそんなことをいったのかは、確認しないし、またしようとも思わない。（同、p.8）

ルソーの「自然に帰れ」の初出は、1901（明34）年の高山樗牛『文芸評論』のなかの「ルソーが自然に還れと説きし」（高山、1901、p.378）のようである。三浦訳『エミール』の解説には『『自然に帰れ』と高調し』（三浦、1913、p.9）とある。その後、西洋史の教科書の大類伸『新体西洋歴史』1930に『『自然に還れ』と絶叫して』（大類、1930、p.174）、長田新『近世西洋教育史』1936に『『自然に還れ』といふ彼の教説』（長田、1936、p.114）と、ルソーの思想が説明された。

戦後、長田は日本教育学会初代会長を務めた。1949年に長田新『近世西洋教育史』が再版され、高校教科書1954年検定済、大類伸『世界史』好学社に『『自然に帰れ』と叫んだ』と記された。1955年に『広辞苑』初版の「自然」の項に「一に還れ（ルソーの語）」と記された。これは、フランス文学者であり『広辞苑』編者の新村猛（1905-1992）によるものだろう。そして、1962年に桑原武夫『ルソー』岩波新書が出版され、『『自然に帰れ』』というのがルソーのもっとも有名な言葉だ』（桑原、1962、p.95）と記された。その後、「自然に帰れ」の言葉が一気に高校の教科書に広がった。1969（昭44）年検定済の倫理・社会の教科書では、『『自然にかえれ』と主張した』実業出版、『『一。』と叫び』教育出版、と記し、1970（昭45）年検定済の世界史の教科書では「一と叫んで」山川出版、『『一』と叫んだ』清水書院、「一と訴えた」好学社、「一と訴えた」学校図書、「一と唱えて」帝国書院、と記してルソーの思想を説明した。

岩波新書の『ルソー』は、桑原が「一般向きの教養書を（中略）書くように頼まれ」（桑原、1962、p. ii）たものである。専門書『ルソー研究』の執筆陣のうち、研究代表の桑原と若手の多田道太郎、樋口謹一、河野健二が執筆した。当該部分は、多田の分担である。この一文を多田と桑原のどちらが書いたのかはわからない。クレジットは桑原のみであり、執筆分担者は「まえがき」で示されているだけである。

かくして戦後日本の「知」を牽引した広辞苑、岩波新書、岩波書店、京都大学人文科学研究所といった「お墨付き」のもと、ルソーの「自然に帰れ」は高校の教科書に載り、日本人の「教養」となり「常識」となった。教科書作成者たちは「いつどこでルソーがそんなことをいったのかは、確認しないし、またしよう



とも思わぬ」(小林, 1985, p.8) かったようである。

新堀(1957), 平岡(1966), 小林(1971), 森田(1973)と, ルソーの著作を読み込んだ研究者たちが「自然に帰れ」の誤謬性を示した。すると世界史の教科書から「自然に帰れ」の文字が消えた。1982(昭57)年検定済以降の高校・世界史の教科書に「自然に帰れ」の文字はない。一方, 高校・倫理の教科書は「自然に帰れ」を載せ続けた。1987(昭62)年改訂検定済の『現代倫理』清水書院に「人間はその根源の本性を取りもどし, 人間の存在の固有の根拠にたちかえって, 再出発せよ, というのである。これが『自然に帰れ』という言葉の真の意味である。かれは, 当時の腐敗した旧制度の社会を否定し, 自然法の理念を実現する社会の建設を目ざした」(『現代倫理』清水書院, 1987, p.67)とある。小林論文への反論として記されたのだろうがその内容はこじつけといえよう。

現行2022(令4)年検定済高校・公共の教科書で11種中1種が, 倫理の教科書で5種中5種にルソーに関して「自然に帰れ」と記されている。かつてのように「一と叫び/訴え/唱え」としているものはないが, 「自然を理想とするルソーの考えを表すものとして『自然に帰れ』という標語が使われることがある」(『詳述倫理』実況出版, p.97)と, あいまいな解説のもとにこの言葉を書いている。坂本雅彦は, 「当該研究者の頭の中で組み立てられたにすぎない『体系』をルソーその人に帰し, それを『ルソーの教育思想』の名で呼んでこなかったらどうか」(坂本, 1999, p.89)という。ルソーの「自然に帰れ」を載せる教科書作成者は, ルソーを特殊なかたちで援用することによって自らの思想を伝えようとしているのだろう。それは彼らが実践する社会運動であるが, 真理を追究する学問ではない。

戦後日本の学校教科書をみると, ルソーを「偉人」と称えるものはあっても, 「テロリズム」の語源が, ルソーの信望者であったロベスピエール(1758-1794)の恐怖政治にあることを示したものはない。ルソーから影響を受けた20世紀の人物の一人にカンボジアの独裁者ポル・ポト(1925-1998)がいる。ポル・ポトは, 留学先のパリで, ルソーを読み, 同士とともにポル・ポト派をつくった。帰国後, 政権を掌握したポル・ポト派は, 「腐敗した旧制度の社会を否定し, 自然法の理念を実現する社会の建設を」はじめた。ルソーの思想を「自然に帰れ」と解釈し, その実現を目指したのである。政敵はもとより, 知識人や専門職従事者, ひいては, メガネをかけている人や時計をはめている人

までを「自然でない」として抹殺した。ポル・ポト派が, 全権を掌握した1974年からの約4年間にカンボジア国民の1/3, 170万人といわれる人々が殺された。あらゆる社会運動は, それを行う人にとっては「正義」であろう。権力者による「正義」の執行は, とてつもない悲劇になりえる。

戦後の日本社会に広がったルソーの「自然に帰れ」言説とは, ルソー自身はそういっていないにもかかわらず, ルソーに帰すもとした左派的な社会運動の一端であった。日本で, ルソーの「自然にかえれ」言説を広げた人たちは, ルソーを礼賛するばかりで, ルソーが後世に与えた負の影響から目をそらした。それは, ルソーを一人の実際に生きた人間とみなさない差別的な態度といえよう。

## 2.5 戦後の新教育運動と「子どもの発見」

終戦まもない1947(昭22)年に梅根は『新教育への道』を著し「ルソーこそは実に教育史上, この問題[自由な個人と社会の成員の矛盾]を初めてハッキリととらえた人であります(中略)彼はこの『問題の発見者』であったのです(中略)この新教育史上の名誉は永久に彼の頭上に輝くでありましょう」(梅根, 1947, p.281)と記した。戦後, 「自我の発見」「生活の発見」など「発見」の語の利用が流行するが, 梅根の一文はそのはしりである。

「子どもの発見」の戦後における初出は, 雑誌『教育技術』にある不良防止の論考での「20世紀の偉大な発見は婦人と子供の発見である」(石田, 1948, p.12)のようである。これは戦前に田中が綴り方教育を論じた際の「現代に於ける一大発見は, 子供と婦人を見出したことでなくてはならない」(田中, 1924, p.125)に依拠したものと思われる。その後, 雑誌『教育技術』(関連誌『小1-6教育技術』『幼児と保育』を含む)で, さまざまな論者が別々の文脈で「子どもの発見」を使った。また, イタリアの幼児教育者モンテッソーリ(1870-1952)の*Discover of the Child*, 1948が出版されると, 稲垣友美が, 教具史を語るのに「子どもの発見」を使った(稲垣, 1949, p.221)。このように戦後まもなく「子どもの発見」の言葉を使って教育を語ることが流行した。

雑誌『教育』の1961年1月号は「子どもの発見」をテーマにした特集である。時代は左派運動が高まりをみせていた。巻頭言に『『子どもの発見』とは, このような実践的な概念であり, 実践的な過程である』(北田, 1961, p.5)と記された。この号で教育学者の

周郷博（1907-1980）が「子どもというものを人間として『発見』した最大の思想家といわれるルソーの『エミール』」（周郷，1961，p.7）と記した。周郷が「子どもの発見」の言葉とルソーを結び付けたこと、そして「人間として」と記したことが、後に影響を与えることになる。同じ1961年に梅根悟（編）『近代の教育思想』岩波書店が出版された。この本では編者の梅根悟をはじめ、砂沢喜代次、鈴木秀一、太田堯といった教育学者たちが「子どもの発見」の言葉のもとに西洋教育思想史を語った。梅根は「子どもの発見」の見出しのもと「人間的で合理的な教育方法の発見であった。そしてルソーはその歴史の上にそびえ立つ巨峰的存在だった」（梅根，1961，pp.7-8）と書き、論文のまとめを「近代的教育思想はルソーに、きわだった始点をもっている」（同，p.10）と、ルソーを近代教育思想の創始者とみなす梅根の見解をあらためて示した。

梅根の回顧録に『エミール』は私の教育思想の育ての親，「自分の研究を自分の社会的活動と表裏をなすものにしなければならなかった」（梅根，1975，pp.223-224）とある。梅根は、戦後の新教育運動の主導者である。梅根は、自らが推進する社会運動のスローガンとして「子どもの発見」の言葉を使ったのである。

## 2.6 発見から発見者へ

ルソーは「自然に帰れ」といっていないが、日本では「自然に帰れ」の言葉のもとにルソーが語られていた。そして、この間違った「知」の拡大の発信源の一つに岩波新書『ルソー』があった。そして同じ『ルソー』に「子どもの発見」の見出しのもと「少年時代はけっして成人となるための踏み台ではなく、少年時代はそれとしての独自の価値をもつという主張、それは今日においては常識であろうが、ルソーがこれを唱えたところにおいては、まさに驚くべき新発見であった」（桑原，1962，p.47）とある。この箇所は、樋口謹一の分担である。樋口は政治思想を専門とし教育について論じたものはこの本以外にない。『近代の教育思想』1961の梅根のルソー論を受け売りのように依拠したのだろう。

1962年に今野訳『エミール』岩波文庫が出た。解説に『『子どもの発見』ということが教育思想におけるルソーのもっとも大きな功績だといわれています』（今野，1962，p.7）とある。今野も梅根の『近代の教育思想』1961を念頭においたのだろう。

岩波新書『ルソー』と岩波文庫『エミール』が出版された1962年、教育思想史の鈴木秀勇が「ルソーは、子どもの発見者であり、子どもの権利宣言者である、といわれます」（鈴木，1962，p.103）と記し、やはり教育思想史の柳久雄が『『子どもの発見者』といわれるルソーにおいて』（柳，1962，p.24）と記した。こうして、日本の「教育史上では、ルソーを『子どもの発見者』と呼んでいる」ことになった。

1970年代に、教育関係のさまざまな文献に「小さな大人」という言葉を使った解説のもとに「子どもの発見者」としてルソーが記され、ルソーの「子どもの発見」言説は日本の教育界の「常識」になった。1915（大4）年に上野陽一が『小学校 初等教育研究雑誌』に論文「ルソーと現代教育」を載せ、「子供を以てただ『小さな大人』として取扱って居るに過ぎないのが、今日の現状ではないか」（上野，1915，p.59）の前置きのもとルソーを紹介した。こうして大正期に「小さな大人」の言葉を使って従来の教育を批判しつつルソーを紹介する語りの形式が生まれた。参考文献は示されてないが外国の文献に依拠したようである。1918（大7）年に文部省が出版した『時局に関する教育資料（第16集）』ではイギリスの雑誌記事の訳文に「仏国で最も進的な小学校に於てすら漸く最近に至り児童を児童として取扱い、小さな大人と考へなくなった」（文部省，1918，p.179）とあり、やはり「小さな大人」の言葉を使って従来の教育を批判している。ただし、「既に1590年の昔に於てモンテーヌは『児童の遊戯は単なる遊戯でなく、遊戯以上の重大なる作動である』と書いた」（同）と続き、ルソーの2世紀前を生きたモンテーニュが「子どもは小さな大人ではない」ことを示していたとしている。日本の教育界では一般に、ルソーは「子どもは小さな大人ではない」と説いたとされているが、ルソーは反対に「子どもを小さな大人と呼ぶこともできよう」（ルソー，1962（1762）p.80）と記している。つまり、ルソーの教育思想を「子どもは小さな大人ではない」の言葉で語るとことは、当のルソーをも無視した放逸な解釈である。

1978年に森田伸子はアリエスの仕事を紹介しつつ『エミール』こそ、近代教育史上の子どもの発見という、かがやかしい業績を代表する作品として、広く認められてきた」（森田，1978，p.13）ことへの違和感を表し『エミール』はこうした一般的傾向を背景として、むしろそれを理論的に追認したものすぎない」（同）と記した。同年、武田晃二は「ルソー教育



論の大きな功績が『子どもの発見』にあることが通説的に承認されている」事情は『『自然に還れ』についても全く同様』（武田，1978，p.270）といい、『『子どもの発見』という表現自体がルソー教育論の本質的性格から遊離する可能性をはらんでいる』（p.273）と記した。

新堀，平岡，小林，森田による「自然に帰れ」の誤謬性の指摘が「圧倒的な大合唱」（小林，1985，P.12）によってかき消されたように，森田や武田の「子どもの発見」の誤謬性の指摘もまた，日本の教育界の「大合唱」のなかでかき消された。

## 2.7 戦後教育学とその残像

終戦から1990年頃までの日本の教育学を「戦後教育学」と呼び，以降の「冷戦後教育」と分けることがある。下司晶は『戦後教育学』とは，第二次世界大戦の敗戦を契機に，戦前戦中の超国家主義への反省を軸として形成された日本の進歩的教育学の総称であり，「戦前／戦後の断絶説の立つ」ことや「人権等の18世紀市民世界論の理念を称揚」（下司，2016，p.259）などを特徴にするという。つまり「戦後教育学」は，戦前・戦中とのくびきを断ち，新しい社会をつくることに重心を置いた社会運動であった。「戦後教育学」は，戦前・戦中の「聖典」教育勅語を葬るとともに，ルソーをはじめとする西欧近代の「大思想家」の書物を「聖典」として，そこに記された「真理」を伝えることを営みの中心とした。こうした「神学」とも呼べそうな「戦後教育学」の中心に稲富と梅根がいた。

1991年に「近代教育思想を批判的に考察すること」を目的とする近代教育思想史研究会（現：教育思想史学会）が設立された。機関紙『近代教育フォーラム』創刊号で安川哲夫は「誰をもって戦後の教育史学を代表させるか（中略）影響の大きさの点で真っ先に挙げなければならないのは『梅根史学』であろう」（安川，1992，p.75）としながらも「少々厄介な問題」（同）を理由に考察対象を変えた。日本の教育界が「梅根のパラダイムのうちにあったため対象化が困難」（下司，2020）だったのだ。梅根に関する研究は，記念・追悼・整理的なものを除けば渡邊隆信（2014）まで待つことになる。稲富を対象にした研究も小笠原（2020）までなかった。かくして，戦前に稲富と梅根がつくり，戦後になって日本の教育界の「常識」となったルソーの「子どもの発見」言説は，その誤謬性を問われることもなく，現在まで存在してきた。

1960年にフランスのアナール学派の歴史学者フィ

リップ・アリエス（1914-1984）の *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien régime*（アンシエン・レジーム期の子供と家族生活）が出版され，「子供の誕生」のタイトルが付けられた邦訳書が1980年に出た。アリエスは，中世期から18世紀までの図像，墓碑銘，日誌，書簡などを分析することにより，人々の日常世界を支配する感情の変遷を描いた。アリエスは，中世では子供はたくさん生まれ，まもなくその多くが死んだから，子どもが死んでも親が悲しむということではなかった。中世では，8才程度で徒弟にでるのが一般的で大人同等に扱われ，性に関する会話も大人に混じって交わされた，などの例を示し「中世の社会では，子供期という観念は存在していなかった。（中略）子供に固有な性格，すなわち本質的に子供を大人ばかりか少年からも区別するあの特殊性が意識されたことと符合するのである。中世の社会にはこの意識が存在しなかった」（アリエス，1980（1960），p.122）と，近代化における，徒弟制度の終焉，学校教育の広がり，核家族化のなかで「子ども」というまなざしが生じたという。「子ども」は近代に作られた概念であるというアリエスのテーゼは，1960年代の近代社会批判の動きのなかで，まず，米国の社会学者や教育学者に衝撃を与えると同時に，アリエスの研究の不備への批判が続出した。現在では，中世において子ども期という観念がなかったといいきれものではなく，中世においても，子どもを大切に思う親がいたし，近現代においても，そう思わない親がいる。そもそも中世とか近代とか，一言でくくれるような同質的な状況が存在したことはなく，安易な一般化は避けるべきであり，個々の状況を丁寧にみていく必要がある，という至極まっとうな子ども史観が学問上の主流である。いずれにせよ，欧米では，アリエスをきっかけに，子ども観は時代や状況により変化するという理解が共有されるようになり，子ども観の変遷に関する研究が深化した。

一方，日本で発生したルソーの「子どもの発見」は，事実にもとづかない非学術的な言説であるにもかかわらず，戦後日本の教育界の「常識」として定着し，そのまま研究対象になることもなく，現在に至るのである。

## 2.8 教育という権力装置

日本の公立学校の教員採用試験は都道府県や政令指定都市などに分かれておこなわれる。筆記試験は，教職教養，一般教養，専門教養，小論文からなり，うち教職教養には大概，思想史に関する設問がある。ル

ソーは、コメニウス、ペスタロッチ、フレーベル、デューイとともに定番の教育思想家である。また、教職教養のなかの教育原理や一般教養の人文社会分野においてルソーに関する問題が出されることもある。ルソーに関する問題は大概「エミール」「消極的教育」「自然主義」「自然に帰れ」「子どもの発見」といったキーワードを知っていれば解けるものである。本来複雑な人間の思想を短くまとめた言葉は、効率的に知識を問う試験問題に便利である。

教員採用試験の過去問題に『『子どもの発見者』』ともいわれる。自然主義教育を展開し後の教育学者たちに強い影響を与えた（答：ルソー）（1981年実施岡山県）がある。翌年には「与えた」が「及ぼした」に変わった問題が神戸市で出されている。神戸市の出題者は、ルソーの著作を読んだり、ルソー研究の動向を確認したりすることなく、過去の問題をもとに作成したのだろう。ルソーの「子どもの発見」は1980年頃から教員採用試験の定番になった。

ルソーの「自然に帰れ」は、1982年検定済以降の高校・世界史の教科書にはないが、高校・倫理には現在もある。教員採用試験においては、1990年代半ばまでは出題が続いたが、その後はあまり出題されなくなり、2015年実施が最後のようなのである。一方、ルソーの「子どもの発見」は、2019年実施埼玉県・さいたま市や2021年実施岩手県にみられるように現在も定番である。

2012-6年実施の教員採用試験の西洋教育思想史の問題を分析した相馬伸一らは次のようにいう。

知識は要約や体系的な説明をとおすことで社会に広く伝播する。その過程では知識の歪曲や誇張が生じる場合がある。もし教員採用試験に事実の誤認に基づくような内容があれば、それらは是正される必要がある。（相馬ほか、2017、p.117）

ルソーの「自然に帰れ」と「子どもの発見」の言説が日本に定着する一因となった『ルソー』岩波新書を著した桑原たちは、それらの言葉が自分たちの想像を超えて広がったことに戸惑いを覚えたことだろう。桑原たちは、すでにルソーと絡めて使われることがあったからそれらの言葉を載せたのであって、とりたてて、ルソーを「自然に帰れ」の思想家として位置づけようとしたり、「子どもの発見」をルソーの教育論のキーワードとして普及したりしようとは思っていなかっただろう。桑原、樋口、多田は『ルソー』岩波新書のほかに「自然に帰れ」「子どもの発見」を使っていない。

ルソーの「自然に帰れ」言説は、現在、高校・倫理の教科書には記されているものの、日本社会全体としては消滅の道をたどっているようである。一方、「子どもの発見」は、誰もルソーを「子どもの発見者」と呼んでいないにもかかわらず、現在も、ルソーは「子どもの発見者」と呼ばれることになっている。そして、それは「教育」という「権力装置」の中で発生、定着し、そして閉じている。

### 3. まとめ 「子どもの発見」という誤読と「人間」

日本におけるルソーの「子どもの発見」言説の発生と定着の過程をまとめると次のようになる。

- ・「子どもの発見」という言葉は、大正期の新教育運動のスローガンとして生まれた。
- ・1932年に梅根悟が日本で最初にルソーを近代教育思想の創始者として記した。
- ・1935年に稲富栄次郎が「子どもの発見」の言葉のもとに、ルソーの『エミール』を示して、日本におけるルソーの「子どもの発見」言説が発生した。
- ・戦後、稲富と梅根は日本の教育学を担う存在になった。
- ・梅根悟（編）『近代の教育思想』1961においてルソーを近代教育思想の創始者とみなす見解をあらためて示し、その文の見出しを「子どもの発見」とした。
- ・『近代の教育思想』1961をもとに、桑原武夫『ルソー』岩波新書1962と今野一雄訳『エミール』岩波文庫1962に「子どもの発見」が記され、まもなく、「ルソーは『子どもの発見者』と呼ばれる」ことになった。
- ・1970年代、教育関係のさまざまな文献に「子どもの発見者」としてルソーが記され、ルソーの「子どもの発見」言説は日本の教育界の「常識」になった。
- ・1980年代にルソーの「子どもの発見」が教員採用試験の定番問題となった。
- ・1990年頃、それまでの「戦後教育学」が「聖典」としてきたものを批判的に検証する「近代教育学批判」が興った。しかし、戦後日本の教育界の重鎮、稲富、梅根を批判的に検証することは控えられ、両氏に発するルソーの「子どもの発見」言説は、現在に残った。
- 戦後のルソーの「子どもの発見」言説は、1961年に周郷博が「人間として」、梅根悟が「人間的で」といって発生したが、彼らの理解は正しかったのだら

うか。ルソーは「子ども」の反対概念を「人間」とし、「子どもは人間でない」としていたのである。日本におけるルソーの「子どもの発見」言説は、その発生時からボタンをかけ違えていたのだ。この「誤読」は、真理の追究よりも、社会運動の場となってきた「教育学に固有の『誤読』のあり方」（森田，1992，p.38）であった。カッシーラーがいうように、ルソーを読むということは、常に新しく重要な問題をわれわれに突きつける。しかし、われわれは、未だルソーを読むことができていない。

#### 引用文献

- アリエス，フィリップ『子供の誕生：アンシャンレژیーム期の子供と家族生活』みすず書房，1980（1960）
- 石田秋三「小学校児童の不良化防止について」『教育技術』3（4），1948
- 稲富栄次郎『教育作用の本質』目黒書店，1935
- 稲垣友美『教具と学習指導』牧書房，1949
- 上野陽一「ルソーと現代教育」『小学校』20（2），1915
- 梅根悟「ドイツに於ける教育哲学の趨向」『教育学研究』1（1），1932
- 梅根悟『新教育への道』誠文堂新光社，1947
- 梅根悟「近代教育思想の理解のために」『近代の教育思想』岩波書店，1961
- 梅根悟『ルソー『エミール』入門』明治図書出版，1971
- 梅根悟『小さな実験大学』講談社，1975
- 大類伸『新体西洋歴史』富山房，1930
- 長田新『近世西洋教育史』岩波書店，1936
- カッシーラー，E.『ジャン＝ジャック・ルソー問題』みすず書房，1997（1932）
- 北田耕也『『子どもの発見』ということ』『教育』124，1961
- 桑原武夫『ルソー』岩波書店，1962
- 下司晶『教育思想のポストモダン』勁草書房，2016
- 下司晶「戦後教育学」における『近代』評価の再検討」（科学研究報告書）2020
- 小林善彦「自由についての二つの考え方（下）」『思想』565，1971
- 小林善彦「ルソーと『自然にかえれ』について」『外国語科学研究紀要』33（2），pp1-20，1985
- 坂入明「ルソー教育思想の先駆者を求めて」『東京家政大学研究紀要（1）人文科学』19，1979
- 坂倉裕治「日本の近代化と『エミール』」『思想』1027，2009
- 坂本雅彦「坂倉裕治著『ルソーの教育思想：利己的情念の問題をめぐる』」『教育哲学研究』80，1999
- 周郷博「子どものヴィジョン」『教育』124，1961
- 鈴木秀男「コメニウスの『教育思想』」『教育』150，1962
- 相馬伸一・室井麗子・椋木香子・小山裕樹・生澤繁樹「教員採用試験における教職教養分野の特質と課題」『広島修大論集』58（2），2017
- 高山樗牛『文芸評論』博文館，1901
- 武田晃二「ルソー教育論の超克とその方向（上）」『岩手大学教育学部研究年報』38，1978
- 田中豊太郎「綴り方教育の新潮」『教育研究』276，1924
- 富田晃「ルソー『エミール』（1762）読解のための序説」『弘前大学教育学部紀要』125，2021
- 新堀通也『ルソー』牧書店，1957
- 根岸喜明「童話私論」『小学校』35（2），1923
- 原聡介「戦前のわが国におけるルソー教育思想のとらえ方」『教育学研究』45（4），1978
- 平岡昇『ルソー』中央公論社，1966
- 森田伸子「ルソーにおける発達の自然観の形成と教育関心の成立」『拓殖大学論集』94，1973
- 森田伸子「近代的孩子観の形成と『エミール』」『教育学研究』45（4），1978
- 森田伸子「教育学的言説の彼方へ」『近代教育フォーラム』1，1992
- モンテーニュ『エッセー（1，3）』（原二郎訳）岩波文庫，1965，1966（1580，1588）
- 文部省『時局に関する教育資料（第16集）』，1918
- 宮川菊芳「国語教育問題雑組」『教育研究』287，1925
- 安川哲夫「教育史研究の方法論的再検討」『近代教育フォーラム』1，1992
- 柳久雄『生活と労働の教育思想史』御茶の水書房，1962
- ルソー『人生教室エミール』（三浦関造訳）隆文館，1913（1762）
- ルソー『人間不平等起原論』（本田喜代治，平岡昇訳）岩波書店，1933（1755）
- ルソー『エミール（上・中）』（今野一雄訳）岩波書店，1962，3（1762）
- ルソー『エミール』（永杉喜輔・宮本文好・押村襄訳）玉川大学出版部，1965（1762）
- 渡邊隆信「梅根悟と教育史教育」『兵庫教育大学研究紀要』44，2014

（2024. 1.10 受理）